

国語

➡ 高学年 | 「読むこと、話すことの学習として」

「授業」をプレゼンしてみよう

1. 言語活動の集大成として

6年生では、パネルディスカッションや討論会、環境や平和に関する意見文を書くなど、自分の考えを明確に表現する学習活動が多く見受けられます。いずれの場合も、テーマを決めて調べ学習を行い、それに基づいて自分の考えを主張するというスタイルをとりがちですが、ここでは、言語活動の集大成として使える、「授業プレゼン」の実践を紹介します。

2. 自分たちで、「授業」を考えて実行する

「君たちが先生の代わりになって、クラスのみんなに『授業』をしてください」

例えば、「環境問題」を扱った説明文の学習なら、適当な長さの説明文を5～6本用意します。そして、自分が読んでみたい説明文を選ばせてグループを編成し、授業を行うという活動目標を示すのです。

「『はい、〇〇君』とか、先生みたいに指名したりしてもよいのですか?」「いいです」

「テストを作って、みんなにやってもらうのは?」

「授業の終わりに小テストくらいならありですね」

教科書に点在している「言語事項」に関する内容、例えば、「同音異義語」「和語と漢語、外来語」「敬語」「仮名の由来」「話し言葉と書き言葉」「熟語」などをまとめた「言葉を見つめる」といったテーマや、「短歌や俳句」での実践も可能です。

3. 「発表」と「授業」との違いを意識させる

自分たちがわかったことや、考えたことを並べただけでは授業にはなりません。受け手である友達に「何を学んでほしいのか」「どのように行うか」が、発表とは違う「授業」を考える大切な視点です。教師

が「モデル授業」と称して、授業のねらいを説明しながら授業を行ってもよいでしょう。説明文の場合ならば、文章構成などを考えて要点をまとめる、筆者の主張から具体例を紐解く、といった授業スタイルを決める必要もあります。他にも、授業全体の流れ、進行、補助説明、板書などの役割、説明に必要な板書や掲示資料など、教育実習生が研究授業を行うのと同じような課題を解決する必要があります。

4. 「授業」とは何かを学ぶ

最初のグループから「授業」を行っていくにつれて、教室の空気が劇的に変化していきます。先に授業を行ったグループの子どもたちが、積極的に他のグループの授業に参加するようになるのです。理由を聞くと、「『わかる人』って聞いた時に、誰も手を挙げてくれなくて困ったから」「自分の考えを言わないと授業が成り立たないし、自分も学べないから」などの答えが返ってきました。つまり、授業者の視点に立つことで、授業のもつ意味や参加することの価値が明らかになるのです。

また、同じテーマの授業を受けることで、子どもたちは自然に「多角的に見て考える」ことの大切さを学んでいきます。最後のグループの授業が終わったら、今回の授業を通しての学び(まとめ)を書いてもらいましょう。ポイントは、①そのテーマ(内容)について、今の自分の考え②今回の「授業」を行うことを通して学んだことの二つです。間違いなく、個々の子どもにとって一番心に残ったことを中心とした意見文が書かれてくるはずです。

「先生ってすごい。私たちが何人もかかってやったことを、いつも一人で全部しているのだから」と、教師の評価が高まるおまけもつきます。